

漢法苞徳塾資料	No. 525
区分	治療
タイトル	鍼灸による三因病治療の基本原則
著者	八木素萌
作成日	2000.09.10 第28回伝統鍼灸学会・シンポジウム用

治療原理

全ての疾病の治療や一般的保健法として、時気＝季節の気に対する取穴治療は、効果的に体調を調整する。病の場合であってもこの施治のみで、一切の愁訴が消失してしまう場合が少なくない。

◆外感病

具体的には温病（広義）と傷寒病（広義）として捉える。基本的には病因の指示する五行の陽経の瀉と、表裏関係にある陰経の補：特に留意しなければならぬのは、温病では軽い場合でも、気分（陽明経証）になっていることが多い点であり、容易に陽明府証に移行しやすい傾向がある点であろう。

①温病（広義）

手の経脈を主とし、足の経脈を従として用いる。発病時期に応じて変動している陽経の穴（3月発病で変動経は胆経の場合なら胆経の井穴）を取穴し、咳嗽があれば胆経の経穴を用いるが、咳が小腸咳ならば小腸経の経穴に変更する。温邪は陰を冒しやすいので病証の五行もしくは罹病時期の五行の陰経を取って用い、その背腧穴（背腧～咳嗽：肝俞～3月の罹患）を補す。陽明の経証や府証が多い訳であるから、下法や和法と清法の併用となるように配穴に工夫する。榮分や血分において温病の邪の為に虚熱が生じている場合は、治療施術上難しいことが多いので注意深く対処しなければならない。

②傷寒病（広義）

足の経脈を主とし、手の経脈を従として施治する。補津の重要性は傷寒論の協調するところであり、多くの場合に足の三里の治療が指示されている。

◆内傷病

具体的には雑病・奇病・情志病として対応する。先天的な問題性は体型・顔貌型・誕生年の干支や九曜や本来の皮膚色などの五行によく表現されている。具体的に病証を現わすのは、やはり、季節変動に大いに関係している。普通の人にとっては病因として作用しない程度の気候の変化に先天的なものが反応している。それは、これらの人に多い生理的な産生物としてのもの（痰飲癆および虚火）が、経気の疎通を妨げるようになる（病理的産生物に転化する）ために、発症するのである。

時邪＝季邪となっているものの瀉（剛柔関係や畏穴、畏経や経の表裏上下など、また時間や日柄の影響など、複雑極まりない相互関係を利用した方式ゆえに「間接瀉法」と仮に呼んでおく）、病理的産生物の処理、病臓の処理（補の場合も瀉の場合も状況に従って対処する）、元来先天に問題があるのだから、患者の特質に応じた補の対処措置は必須なものである。また、経病としての「上実下虚」一足少陰・太陽、「上虚下実」一足少陽・厥陰、「下厥上冒」一足太陰・陽明、「厥胸中」一手陽明・太陰、「鬲（今日の縦鬲と解す）中病」一手太陽・少陰の処理問題も重要で不可欠である。

◆不内外因病

房事過多による傷害以外は、すでに治療法が確立されているので、鍼灸治療は補助的な位置になっている。例えば骨折の場合を考えると、苦痛の軽減と治癒期間の短縮の効果は明瞭である。障害されている部位に支配的な経の疎通を図ることと患部での状況に応じた処置が原則である。

◆その他

脳卒中の後遺症に対しても、リハビリの短縮効果は明瞭である。これは不内外因病に分類されないが、特記しておきたい。患側の瀉、健側の補の措置が基本である。発作直後の井穴刺絡の効果は眼を見張らんばかりである。

◆六淫対応原理について

節気	主之	脈状		病因	自穴	畏穴
大寒～春分	厥陰風木	沈滑而長	左関	風	大敦	中封
春分～小満	少陰君火	浮滑而長時一沈	左寸	熱	勞宮：（少府）	（少海）：曲沢
小満～大暑	少陽相火	浮而濇	右尺	暑	液門：（陽池）	天井
大暑～秋分	太陰湿土	長而沈濇	右関	湿	太白	隠白
秋分～小雪	陽明燥金	沈濇而短時一浮	右寸	燥	陽谿：（合谷）	二間
小雪～大寒	太陽寒水	沈而滑	左尺	寒	委中：（京骨）	束骨